

仮名手本忠臣蔵 四段目切 判官切腹の段

杉山其日庵

〈出典：『浄瑠璃素人講釈（上）』（内山美樹子・桜井弘 編）岩波書店、平成16年10月〉

この段は、寛延元〔一七四八〕年辰八月（大正十五年を距る百七十九年前）、竹本座に上場せられ、作者は竹田小出雲、三好松落、並木千柳であると思う。役場は竹本政太夫〔二代〕のはずである。予ても云う如く、他の浄瑠璃には流儀の家元があって自からまたその風がある。長唄には杵屋、一中節には都と云う如く、チャンと一家を建てているが、義太夫節には家元がない。それは如何にも劇の創作が広大にて、ドンナ名人でも一人で丸本全部の五、六段を語り通す事の出来ぬ、大仕掛けの組織であるから、一生懸命で修業して鍛練したのが、一段か二段である。故にこの外題では、筑前掾が「大序」と九段目の「山科」と「七ツ目」の由良之助と語り、政太夫が四段目と十段目の「天川屋」と「七ツ目」の平右衛門を語ったのである。それに後世、四段目の方はやかましく云うて修業すれども、十段目の方は追出の語り物のように心得て馬鹿にしているは、言語道断である。やはりチャンと政太夫風の備わった物であるから、庵主は故豊沢広助〔六代〕に、丸本の黒朱を調べさせて、立派な語り物にして置こうと思っていた位である。「菅原伝授」でも、筑前掾が「大序」と三段目の「茶筌酒」「喧嘩場」から「訴訟」から「桜丸切腹」まで語っており、政太夫が「道明寺」と「天拝山」とを語っている。それに後世、その段の家元の風を滅茶苦茶にして、「道明寺」はやかましく云って、「天拝山」の方は馬鹿にしている。桜丸は大事に河内風など修業すれども、その前は馬鹿にしている。それでは風はないのである。風がなければ、義太夫節は千段も二千段も、一つ節を覚えて三味線に合いさえすれば、「スエテ」も「ハルフシ」も「文弥」も「中落」も「色」も「中」も同じ節で語れるのであるから、修業も何も要らぬのである。

この「判官切腹の段」は、第一語る心得がむつかしい修業である。ドンナ身分の賤い太夫でも、腹の修業に心持が出来て、播州赤穂の城主、五万三千石の大名の江戸屋敷であるとの心持が、この段を語るのである。

先ず「浮世なれ」と云う三重が「裏」で、最も沈重静穩の気に充ち充ちて語らねばならぬ。四段目の「三重」には多く「裏」で出る事が多いが、この「裏」は一種特別である。それから枕半枚は、容易の心掛では云えぬ。大抵泥濘を象が歩くように語るか、講釈師が居睡りをしているような語口に了るが、ソウデはない。ただ腹に吞込んだ厳肅と悽愴の気で語るのである。即ち「塩谷判官」と語り出すに、政太夫の風がある。「扇ヶ谷の上屋敷」と云うに、四段目の音がある。「事嚴重に見にけり」と云うに、云い得られぬ悽愴の気が漂わねばならぬ。

「かゝる折にも」から気を変えて品良く語り、音遣いと「ギン」の音とを落付かせる事を忘れてはならぬ。郷右衛門と九太夫は「色」に語って、外は大抵「中」に語る事は、皆人の知る処である。これは多く四段目にある条件である。「早玄関」から総て河内風を忘れぬ

ように、品良き「中」の音^{おん}にかかって運んで行き、石堂と薬師寺の語り分けが、政太夫が天下一品であったとの事である。「加古川本蔵に抱き止められ」は「やらん^{くすのきまさしげ}に抱き止められ」の方が良いとの事。「湊川にて楠正成^{くすのきまさしげ}」は云わぬが良いとの事。「廊下の襖踏み開き」は「刎ね開き」の方が良いとの事。「ハツト計りにドウと伏す」の一語は、御上使に平伏するのではない。「主君の有様見るよりも」ハツト腰を抜す如き驚きと、落胆の「ハツト計り」である。その次に来る「ハ、、、、、」は、御上使が進めと言って許せども、ちょっと腰も立兼ねると、一方は敬意を御上使に表^{ひょう}するのと、二つの意味にて、「ハツハツハ、、、、、」と云うのである。判官の遺言^{ゆいごん}は、息で聴衆を釣付けて置いて、最も低い小^こ声^{こゑ}で大星に云う。それが大劇場でも聞えるように、芸力^{げいりよく}を養わねばならぬ。「拳^{こぶし}を握り^{うんぬん}」云々の「クリ上^{あげ}」は、尾籠^{びろう}にならぬように、大星^{はらあひ}の腹合が聴衆に徹底するを主として語る。

「シズシズと鼻^かき上ぐれば」は、この上なき憂^{うれい}を含んで語る。「御台所は正体なく」は、人目も構わず泣いて良いとの事である。「嘆き給ふを慰めて」は、是非「地色^{じいろ}」に語らねばならぬとの事。「御菩提所へと急ぎ行」は、この一句を今一段語る積りにて、ユックリと充分^{うれい}に憂いを含んで語れと云うのが教えである。

(初出=大正十年九月・『黒白』五四号)

注

- (1) 六代豊沢広助(名庭絃阿弥)(一八四二~一九二四)。五代豊沢広助に入門、豊沢猿二郎、龍助、二代仙糸、三代広作を経て、明治三十八(一九〇五)年六代広助を襲名。竹本撰津大掾の相三味線として活躍した。大正二(一九一三)年撰津大掾と共に引退し、名庭絃阿弥と名乗る。同十三年三月十九日没。享年八十三。
- (2) 裏。三味線の音よりも低い音で太夫が語ること。
- (3) 一段の冒頭部分。床本の最初の一丁を枕一枚とすればその半分、つまり最初の一頁を指す。「判官切腹の段」の場合、「塩谷判官」から「事嚴重に見にけり」まで。
- (4) 時代物の五段構成における「四段目」と、「仮名手本忠臣蔵」のような多段物の「四段目」を混同した文章。
- (5) 浄瑠璃の詞章では「早御上使の御出でと、玄関表ひしめけば」。